

研究論文

これからの学校に求められる制服デザインの方向性

— コロナ禍における公立中学校の制服に対する意識調査から —

加藤 万紀

北翔大学教育文化学部芸術学科

抄 録

本研究は、公立中学校における制服のデザイン研究である。現在の繊維ファッション産業が抱える問題にも注目し、生徒や保護者、学校における制服へのニーズをより反映した新たな制服デザインを提案することを目的とした。制服の問題点として話題となっている価格の問題、ジェンダーの問題とともに、コロナ禍での、いわゆるジャージ登校に注目し制服の機能や制服のサステイナブルファッション性に着目した。北海道の公立中学校に在籍する生徒とその保護者、そして教員を対象としたアンケート調査を実施し、現在の公立中学校の制服に対する意識や一般的に考えられる制服のメリット・デメリットを探り、制服の様々な問題点を顕在化させ、今後の制服に求められることを調査した。調査結果からは、制服の活動性に多くの問題があることが導き出された。また、改善が実行され始めている価格やジェンダーに対する問題にも更なる工夫が求められていることが明らかとなった。それらの問題点からフォーマル性とカジュアル性を包含しジャージのようにジェンダーレスなデザインを提案する方向性が導き出された。今後、これらの方向性を軸に、求められる機能やイメージの調査結果をまとめ、新たな制服デザインを具体的に提案していく。

キーワード：制服デザイン 中学校 サステイナビリティ ジェンダー

I. はじめに

1960年代に公立中学校で学校制服が制定されるようになった背景と理由について、馬場は、「経済成長にともない被服費が高騰し保護者が制服の方が経済的だと考えるようになったこと、中学校の生徒数が急増して教員の生徒指導上の負担が増大したことに加え、1953年に省議決定された政府の合成繊維産業育成対策の一環として制服の生産拡大に力が入れられ、制服の生産増が推進されたことを背景に挙げている。公立中学校で制服が導入された理由は、派手な服装になることによって生じる「経済的負担の軽減」と、服装の乱れをなくし「服装の規律を保つ」ためであった。」¹⁾と述べている。公立中学校の制服は現在では慣例化し定着しているといえるが、昨今の大きな社会状況の変化の中で、制服に対するジェンダー意識²⁾や制服の高価格化³⁾、そしてコロナ禍における学校生活の変容³⁾など、制服に関係する問題がさまざま顕在化している。

一方、制服を制定せずに服装の自由化を導入している学校もわずかに見られるようになったが、服装が自由になることは、家庭での衣料消費量の増加に伴う経済的負担増だけでなく、衣料廃棄量の増大も予想され、現在の繊維ファッション産業がもたらしている環境負荷を更に深刻化させることが懸念される。衣服のライフサイクルの短期化による大量廃棄を見直すことが国際的な課題となっている現在では、服装自由化を推進することよりもサステイナブルなファッションとして制服の活用を推進するほうが社会から求められるのではないかと考えた。

以上のことを踏まえ、本研究の目的は、これまで考えられてきた制服のメリットを活かしつつ、現在における制服の問題点を明らかにし、制服に関わる生徒、保護者、学校、繊維ファッション産業、社会における制服への様々なニーズをより強く反映した新たな制服デザインを提案することである。特に、新たな制服デザインには、サステイナビリティをふまえ、ジェンダー、価格、衛生・管理面、活動性などに配慮し、これまでのフォーマル性の強い制服ではなく、カジュアル性を組み入れた

日常の学校生活において快適な制服を提案したい。

本研究で、公立中学校を対象にしているのは、制服に関するこれまでの研究はほとんどが高等学校であり、入学者に学校選択権のない公立中学校の制服制定に至る過程において、その目的や生徒及び教員の意見、またその後の意識変化等に関する調査はあまりされておらず、近年における中学校制服についての実態は明らかにされていないためである。また、地域を限定しているのは、北海道の制服に関する研究が少ないこと、重ねて、他都府県とは異なる北海道独特の、四季が明確な風土で研究することで、日本全国においても意義のある研究となりえらると考えるためである。

II. 学校制服の今日的課題点

学校制服に対する議論には、社会のグローバル化に伴って、様々なものがある。1970年代からは「制服着用義務づけは服装選択の自由の侵害であるという考え方が出現している」²⁾が、現代において、これまでになかった新たな視点から発せられる多様な意見が出てきた。その中から筆者がこれまでファッション教育に携わってきた中で重要と考える課題点を4つ挙げ論じたい。

1. 価格の問題

制服の価格については、2016年8月19日付の朝日新聞朝刊で、公立中学校の制服価格が学校や性別で大きな差があると報じられたことで、社会的にも広く問題視されるようになった。制服の種類別では、最安値と最高値を比較すると、最大で4万円もの価格差があり、男女別では1万円ほどの差が見られる。また、ある地方都市の公立中学校の制服が8万円近くと高額であることも話題となった。

公正取引委員会は、制服の販売価格が10年前と比較して16%~17%上昇しているという現状を踏まえ、独占禁止法又は競争政策の観点から、学校選択権が原則として認められていない公立中学校を対象に制服価格調査を実施している。2017年11月、約450校の公立中学の制服価格を調査し分析した「公立中学校における制服の取引実態に関する調査報告書」³⁾を公表し安価で良質な制服が提供される可能性を高める方策を提言した。しかし、2018年、東京都中央区銀座の公立小学校では、高級ブランドのアルマーニが監修した高価な制服を制定したところ、強制力のない標準服としたとはいえ多くの批判が集まり、ニュースでも更に制服価格が問題視されることとなった。この制服は標準服という設定ではあったが、この学校に通う生徒のほとんどは着用した。必要最低限のアイテムの総額は4万5千円程度になり、着替えなどを

購入すると、一揃え9万円にも上る。これらの報道を受け、2018年3月19日文部科学省は、「学校における通学用服等の学用品等の適正な取扱いについて」⁴⁾の通知を全国の都道府県教育委員会などに発出した。それを受けて、学校及び教育委員会は、通学用服等の学用品等の購入について、保護者等の経済的負担が過重なものとならないよう適正な取扱いを求められている。

以上の背景から各公立中学校では制服価格の見直しを図る傾向が見られるようになった。2021年度から、福岡県太宰府市は、公立中学校間での価格差が生じている問題の対処と制服に対する経済的負担の軽減などの目的で市内4校の制服を統一した。同様の取り組みは、2023年度から宮崎県日南市、愛知県春日井市、静岡県裾野市が、2024年度からは静岡県掛川市、兵庫県神戸市で導入されることが予定されている。今後ますます少子化が進む現代においては、制服生産数の減少から価格の高騰化が安易に予測できる。このような状況下では自治体が介入するなどの政策が必要不可欠であると考えられる。またこの取り組みは、4. で論じているファッション産業がもたらしている自然環境負荷への問題解決の一役も担えると考えている。

2. ジェンダーに基づく偏見や不平等

これまでの学校制服が象徴してきたものは、「社会における男と女の役割関係や、求められる人間像」⁵⁾であり、馬場は、「戦後の制服は、性別分業を基盤とする社会の仕組みづくりが強力に推し進められた時代に制定され、男子の詰襟服は「凛々しき・たくましさ」、女子のセーラー服は「可憐・清楚」というイメージと結びついていた。」⁶⁾と述べている。さらに1990年代以降の女子高校生ブームからは女子制服は「可愛らしさ」のデザインイメージが強く打ち出されるようになっていく。

これらの男女差のある制服デザインは、ジェンダー問題が一般化し、ネガティブに問題視され大きな論点となったが、2003年、性同一障害者の性別の取扱いの特例に関する法律が制定され、学校における性同一障害に関わる児童生徒への支援についての社会の関心も高まるようになったことで議論は加速化した。学校現場でその具体的対応が求められるようになってきたことを背景に、2015年4月、文部科学省は「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細やかな対応の実施等について」⁷⁾児童生徒課長通知を出している。翌年には「性同一性障害や性的志向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細やかな対応等の実施について」⁸⁾教職員向け通知が出され、各学校ではより実質的な対応を求められるようになった。その対応は、自認する性別の制服・衣服や、体操着の着用を認めるよう対応を求めているが、男女を区別し

てきた制服では、性の多様性への対応が困難となり、区別しない改善を推し進めている学校も多く見られるようになった。男女同様のジャケットデザインや、好きなボトムスタイルを選べるなどがその一例で、ジェンダレス制服がニュースでも話題になることが多くなってきている。

しかしながら、現実には、パンツスタイルの女子生徒を見かけることは、未だ少ない。スカートスタイルの男子生徒においては皆無である。男子のスカートスタイルは、古い歴史や文化においては、当然とされていることもあった。最近の前衛的なファッションでは、男性のスカートスタイルも受け入れられることも多くなってきてはいるが、機能的な側面から一般的になることは難しいと推察する。しかし、女性のパンツスタイルは、すでに女性の衣服アイテムとして社会的にすっかり容認されているにも関わらず、制服には反映されにくい現状となっているのではないだろうか。

3. カジュアル化している衣服環境

畠山は、「制服は日常的被服としてよりは儀礼的被服として把握する傾向が強いが特別の被服として制服を意識するのではなく、日常的な衣生活経営の中で快適な着装も含めて深くとらえなおしてゆく必要がある。」⁹⁾と提言されていたが、現在においても、フォーマルな装いであることが制服の特徴となっている。学校生活での儀式的な場面やプライベートでの冠婚葬祭の場面などでは、もちろん役に立つ装いではあるが、その機会は非常に少ない。また、学校制服は、社会人となってからの身だしなみの練習機会とも捉えられているが、現代社会では、職種によって様々な装いが受け入れられるようになりカジュアル化が進んでいる。それは、先に女性に顕著に見られていたが、昨今では、男性の装いにもカジュアル化が進んでいる。このコロナ禍では、職種に限らず在宅勤務の仕事方法も急激に増加し、仕事着としても活用でき、自宅ですくつろげ、活動的な場面でも対応できるカジュアルな男性用スーツなども市場に多く出回るようになった。

学校教育の場面でも、コロナ禍においては、衛生面を保持する目的や更衣室での密を回避するために、制服ではなく指定ジャージを着用して登校する生徒も多く見られた。気軽に着用できるジャージでの学校生活に慣れた生徒たちは、ますます堅苦しさのある制服を着用することに抵抗感を持つ可能性がある。

今後は、儀式的な目的だけの学校制服ではなく、現代の衣生活環境に合わせ日常の学校生活で着用がしやすい制服が求められると推察する。

4. 繊維ファッション産業がもたらす自然環境負荷

学校制服を廃止し、服装自由化を導入する学校もわずかに見られる。服装が自由になることでこれまで挙げてきた問題点も、多くのことは解消されると考えられる。

しかしながら、服装自由化は別の問題を引き起こす可能性がある。それは、繊維ファッション産業がもたらしている自然環境への負荷の増大である。「ファッション産業は、製造にかかるエネルギー使用量やライフサイクルの長さなどから環境負荷が非常に大きい産業と指摘されており、国際的な課題」¹⁰⁾となっている。服装が自由になるということは、ファッションに強く興味を示すようになる中学生の時期においては、衣服の購買意欲を増大させ、衣服の消費量が増えることが見込まれる。2021年の環境省の調査では、衣服を手放す手段の約70%が可燃ごみ・不燃ごみとして廃棄されると報告されており、消費量が増えることは、廃棄量も増えることに繋がり易いと考えられる。現在は、繊維ファッション産業でも、サステイナブルな取り組みは積極的に行われており、繊維開発段階やテキスタイル製造工程、染色加工、衣服の生産や販売に至るまでの各段階で、改善が進められている。しかし、これは生産する側の問題だけではなく消費者の問題でもある。消費者が、購入、着用、廃棄に至るまでの衣生活を見直すことも環境負荷を減らせる大きな要因となる。

こういった状況の中では学校制服の影響は大きい。学校制服は、生徒数がある程度見込めるため、余剰生産がされることは考えにくく、また、必要最低限のアイテムで着回していくことが多い。更には、着用しなくなった制服はリユースされやすい。制服企業によっては、着用済みの制服を回収しリサイクルを進めている企業も見られる。現在の環境下では、服装自由化を推し進めるよりも、制服をサステイナブルファッションと捉え、制服を着用することによって次世代のより良い環境に繋がっていくことを伝えるのが教育的観点からも必要なのではないだろうか。

Ⅲ. 北海道の公立中学校制服の現状

以上に掲げた制服に対する今日的な問題点について、北海道の公立中学校に関わる生徒・保護者・教員は、実際には、どのように捉えているかを明確にする目的で中学校制服に関するアンケート調査を実施した。

1. 中学校制服に関するアンケートの実施方法

2021年11月30日から2022年1月30日の期間で、道内の公立中学校の生徒・保護者・教員を対象にWEBによる

アンケート調査を実施した。

調査項目の内容は、概ね以下のように分類できる。生徒、保護者、教員の3者共通の内容として、一般的に考えられる制服のメリット・デメリット、制服に望む機能、新たに望む制服のアイテムやイメージと色、指定ジャージの活用状況と問題点、制服の必要性についての調査を行った。生徒と保護者に共通する内容としては、入学前の制服に対する意識、私服登校を想定した際の衣服の量、小学生時の私服に対する問題点を調査した。さらに生徒には、制服のアイテムごとの所持数と問題点、そして保護者には、現在の制服の改善点、制服の買い替えの有無、制服以外の年間の衣服費、私服登校を想定した際の衣服の量と衣服費の増減変化、卒業後の制服の処理方法について調査した。教員には現在の制服の改善点、制服の価格に対する意識、学校単位ではない制服採用方法の可否などについて重点的に回答を求めた。

2. 中学校制服に関するアンケートの集計結果

道内各地の公立中学校からのご協力をいただき、生徒322名、その保護者348名、教員136名の合計806名から回答を得ることができた。回答者の内訳は以下の図表に示す【表1及び図1-1～図1-5】。生徒からの回答

表1. 回答者の学校所在地

回答者所在地	教員		保護者		生徒	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
札幌市	19	14.0%	118	33.9%	82	25.5%
江別市	15	11.0%	0	0.0%	0	0.0%
恵庭市	1	0.7%	0	0.0%	0	0.0%
千歳市	12	8.8%	24	6.9%	12	3.7%
北広島市	1	0.7%	0	0.0%	0	0.0%
小樽市	3	2.2%	0	0.0%	8	2.5%
島牧村	2	1.5%	0	0.0%	0	0.0%
黒松内町	10	7.4%	0	0.0%	6	1.9%
留寿都村	1	0.7%	0	0.0%	0	0.0%
余市町	1	0.7%	0	0.0%	0	0.0%
夕張市	1	0.7%	0	0.0%	0	0.0%
岩見沢市	19	14.0%	23	6.6%	19	5.9%
美唄市	2	1.5%	19	5.5%	27	8.4%
芦別町	1	0.7%	0	0.0%	0	0.0%
滝川市	1	0.7%	20	5.7%	4	1.2%
砂川市	4	2.9%	2	0.6%	1	0.3%
由仁町	2	1.5%	5	1.4%	3	0.9%
北竜町	3	2.2%	2	0.6%	1	0.3%
北見市	7	5.1%	5	1.4%	5	1.6%
旭川市	2	1.5%	0	0.0%	0	0.0%
愛別町	1	0.7%	0	0.0%	0	0.0%
東川町	1	0.7%	0	0.0%	0	0.0%
上富良野町	1	0.7%	40	11.5%	6	1.9%
帯広市	10	7.4%	37	10.6%	140	43.5%
浦幌町	1	0.7%	0	0.0%	0	0.0%
苫小牧市	10	7.4%	50	14.4%	6	1.9%
函館市	1	0.7%	0	0.0%	0	0.0%
知内町	2	1.5%	1	0.3%	2	0.6%
森町	1	0.7%	0	0.0%	0	0.0%
不明	1	0.7%	2	0.6%	0	0.0%
合計	136	100.0%	348	100.0%	322	100.0%

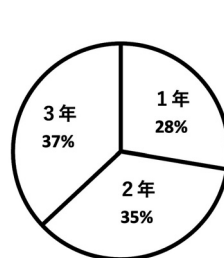


図1-1. 生徒の学年比

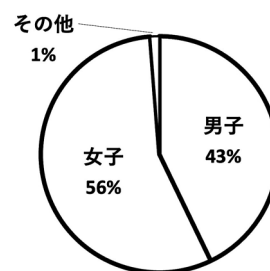


図1-2. 生徒の性別比

は、主に現在着用している制服のデザイン型と性別での比較検討を行った。質問の項目によっては、生徒、保護者、教員からの回答を比較検討した。本稿では、今日的な制服の問題の究明と新たなデザイン提案についての概要を導くために、1) . 入学前の中学校制服に対する意識、2) . 中学校制服のメリット、3) . 中学校制服のデメリット、4) . 中学校制服のアイテムごとの問題点、5) . 指定ジャージの活用状況と問題点、6) . 中学校制服の必要性、7) . 中学校制服のサステイナブル

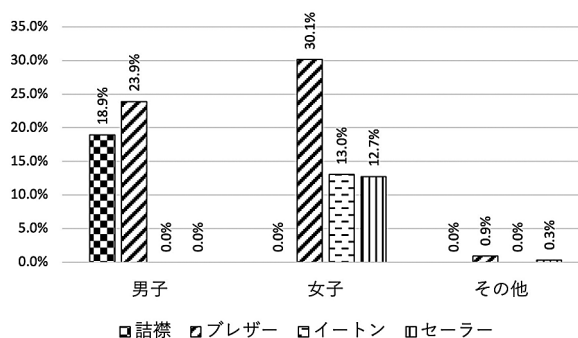


図1-3. 現在の着用制服デザインの割合 (生徒)

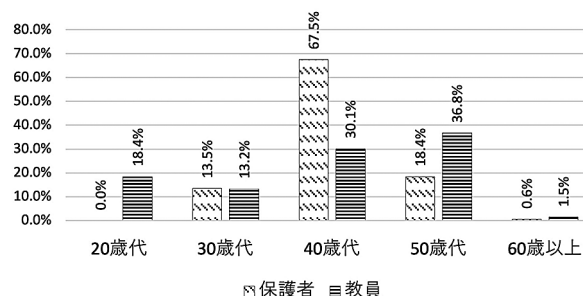


図1-4. 保護者と教員の年齢比

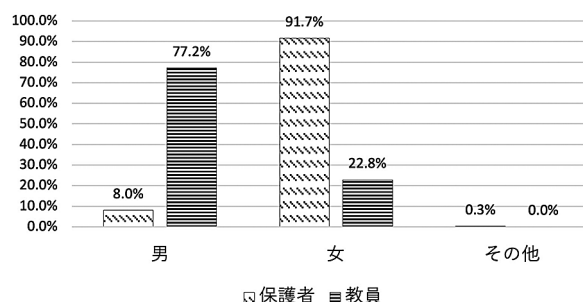


図1-5. 保護者と教員の性別比

ファッション性の7項目について調査結果の考察を行った。

1) 入学前の中学校制服に対する意識

生徒の中学校へ入学する前の制服に対する意識への回答は、制服を着ることを楽しみにしていた34.2%、制服を着ることを当たり前と感じていた31.4%、小学校のときのように私服を着たかった22.4%、その他12.1%であった【図2-1】。どちらかという肯定的な気持ちで制服着用を考える生徒の割合の方が多い。しかし、当たり前というの、楽しみと感じているような積極的な感情よりは、特別な感情がないように受け取れ、制服に対する期待感は低いと捉えることもできる。それは、その他に回答した意見として、「何も感じない」、「なんでも良い」と記述した割合が一番多かったことに表れている。その他、「行事以外はジャージで良い」、「嫌だ」、「窮屈」、「ダサイ」、「面倒臭い」、「違和感がある」、など、否定的な意見ばかりであった。

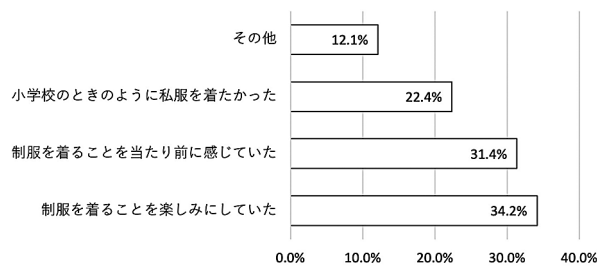


図2-1. 入学前の中学校制服に対する意識 (生徒)

性別での比較では、男子は、制服を着ることを楽しみにしていた12.3%、制服を着ることを当たり前と感じていた41.3%、小学校のときのように私服を着たかった33.3%、その他13.0%であった。楽しみにしている生徒は、12%ほどしかいない。特に、現在着用している制服のデザインが詰襟学生服の男子にその傾向が強く、楽しみにしているのは9.8%と制服への期待感が低いといえる【図2-2】【図2-3】。女子は、制服を着ることを楽しみにしていた50.8%、制服を着ることを当たり前と感じていた24.6%、小学校のときのように私服を着たかった14.5%、その他10.6%であった。半数が楽しみに考えているものの、現在着用している制服デザインのブレザー型、セーラー型、イートン型の制服の順に、その割合は低くなり、特にイートン型の制服は、「ダサイ」、「可愛い制服を着たかった」という意見が記述回答されており、デザイン的な不満を持っている生徒もいる【図2-2】【図2-3】。

性別をその他と回答している4名の生徒では、現在着用している制服が性別によって異なっているデザインの

場合には、「着たくなかった」、「学ランを着たかった」という回答があり、ジェンダーに対する意識から制服に抵抗を感じている生徒が少なからずいる。一方、男女同様のブレザー型の制服デザインの場合には、「制服を着ることを楽しみにしている」、「カッコいいけれど常に着ているのは苦しそう」、という記述回答もあり、男女の差がないデザインによってジェンダーの問題が解消されつつあるといえる。

保護者では、制服を着ることで成長が感じられて嬉しい37.4%、当たり前と感じていた42.5%、入学準備費用がかさむので困る16.1%、小学生のときのように私服を着て欲しい1.1%、その他2.9%であった【図2-4】。制服の存在を当たり前を受け止めている割合が最も多く、生徒と同様、嬉しさを感じるよりも特別な感情はなく素直に受け入れているように見える。また、本来は子供の成長を喜び嬉しい気持ちとなる入学の時期に、費用の負担をまず一番に心配しなければならない保護者がいることは、誰にとっても平等であるべき義務教育の場

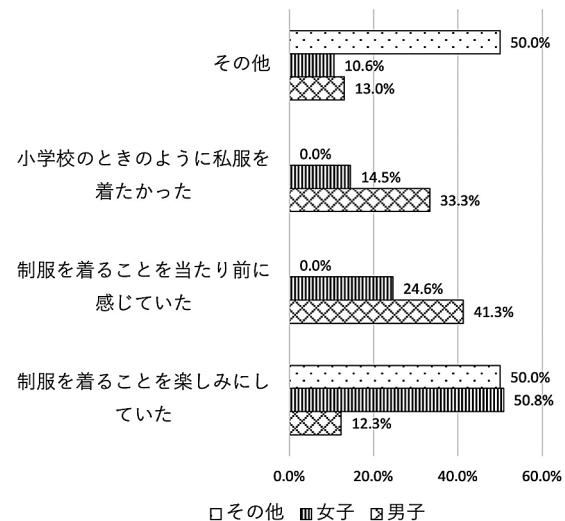


図2-2. 入学前の中学校制服に対する意識 (生徒の性別による意識の違い)

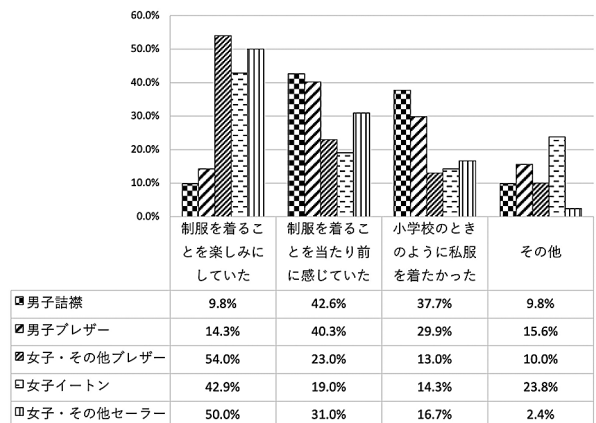


図2-3. 入学前の中学校制服に対する意識 (生徒の現在の着用制服による意識の違い)

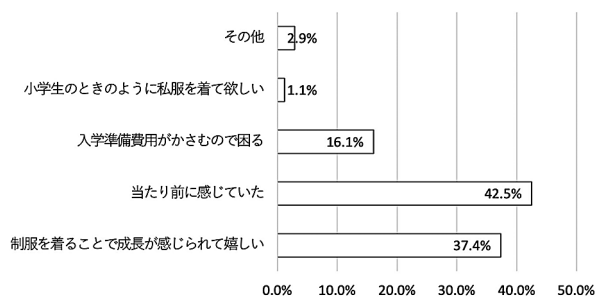


図2-4. 入学前の中学校制服に対する意識 (保護者の意識)

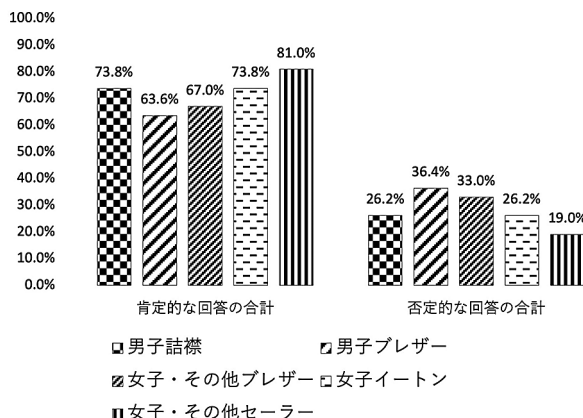


図3-2. 中学校制服のメリット (生徒)
〈冠婚葬祭など学校以外の場面でも着られて便利である〉

は無視できないことである。その他での自由記述でも、制服自体は否定していないが、費用の負担への改善希望的な内容があげられている。

2) 中学校制服のメリット

一般的に制服のメリットと考えられる項目について、生徒が、肯定的(そう思う、どちらかといえばそう思う)と回答したもの。以下同様に示す。)に回答した割合が高い順に列挙していくと、学生らしく見える89.8%、毎日の服装に悩まなくてよい83.9%、冠婚葬祭など学校以外の場面でも着られて便利である70.2%、平等な服装で安心する68.3%、気持ちが引き締まる64.9%、経済的である(私服をたくさん買わなくてよい)52.8%、学校への帰属意識や仲間意識が高まる52.5%という結果となった【図3-1】。

各学校では、学校独自の制服デザイン仕様によって、他校との区別や帰属意識を高める工夫をしているが、学校への帰属意識や仲間意識が高まることについての肯定的な回答は半数にしか及ばなかった。平等な服装で安心感を得られることや、気持ちが引き締まることについて

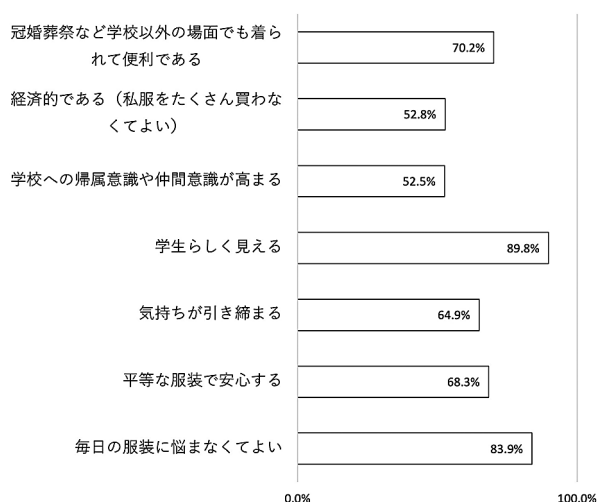


図3-1. 中学校制服のメリット (生徒の各要素への肯定的な回答の割合)

は、7割に及ばず、強くメリットと考えられていることは、学生らしく見えることと、毎日の服装に悩まなくて良い、という2点だった。

制服のデザイン型での比較検討で特徴的だった事柄は、冠婚葬祭など学校以外の場面でも着られて便利であることについて、特にセーラー型の制服を着用している生徒にその割合が多かったことである【図3-2】。性別での差異は大きくは見られないが、男女別の制服デザインを着用しているイートン型、詰襟学生服、セーラー型、の順に肯定的な割合が高くなっている。現在の社会人の服装と共通するデザインのブレザー型よりも学校制服としての独特のイメージが強いデザインの方が、冠婚葬祭の場面での特別感が感じられるということなのではないかと推察した。

保護者については、身だしなみを指導しやすい83.6%、身なりが公平で経済格差が表れにくい80.7%、生徒であることがわかりやすく安全性がある78.4%、生徒を管理しやすい69.3%、学校への帰属意識や仲間意識が高まる62.4%、保護者の経済的負担が軽減される55.2%の順でメリットと感じている割合が高い【図3-3】。

教員の回答は、身だしなみを指導しやすい92.6%、身なりが公平で経済格差が表れにくい91.9%、生徒であることがわかりやすく安全性がある80.9%、保護者の経済的負担が軽減される76.5%、学校への帰属意識や仲間意識が高まる70.6%、生徒を管理しやすい66.9%の順でメリットと感じている割合が高い結果となった【図3-3】。

多少の差異はあるが、保護者と教員ともに、身だしなみを指導しやすい、身なりが公平で経済格差が表れにくい、生徒であることがわかりやすく安全性があることに制服のメリットを感じている。

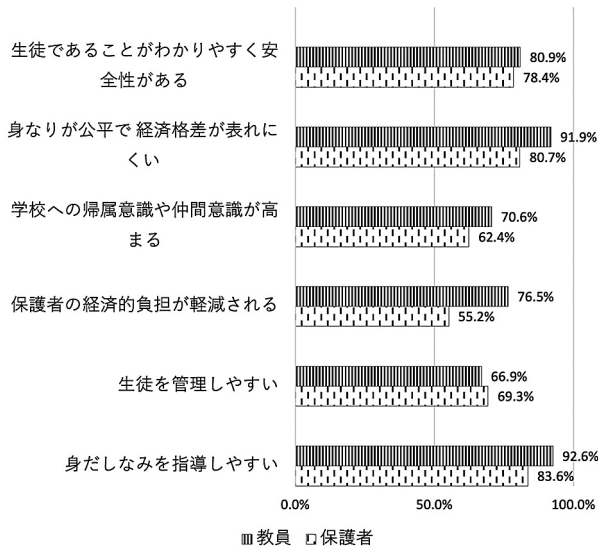


図3-3. 中学校制服のメリット (保護者と教員の各要素への肯定的な回答の割合)

保護者と教員の意見の相違が大きかったのは、保護者の経済的負担が軽減されるといいうメリットであるが、そう考えている保護者は教員よりも少なく、半数の保護者がメリットとして受け取っていない。教員に対しては、自校の制服価格に対するの妥当性も問いているが、高い30%、妥当61%、安い2%であった【図3-4】。また、その他の自由記述では、「わからない」、「知らない」という記述もあり、制服として定めておきながら、その把握ができていない教員がいるという実態もあった。

生徒と同じ質問の学校への帰属意識や仲間意識が高まることについては、教員、保護者、生徒の順にメリットと感じている割合は低い。教員と生徒の差異は、20%近くに及んでいる。教員や保護者が期待するほど、生徒は帰属意識や仲間意識が高まると考えていない。また、制服があることで生徒を管理しやすいと感じている割合も他の項目に比べると低い。制服が制度化された当時の目的であった制服で生徒を管理するという意識は、薄れていることが示唆できる。

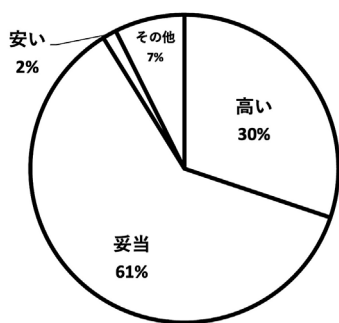


図3-4. 中学校制服のメリット (教員の自校の制服価格に対する意識)

3) 中学校制服のデメリット

一般的に制服のデメリットとして考えられる事柄について、生徒が肯定的な回答をした割合は、堅苦しくストレスを感じる70.2%、好きな服装ができない59.0%、みな同じ服装で自己表現しにくい42.9%、不経済である(私服以外の服を買わなければならない)37%、不衛生である23.6%となった【図4-1】。

項目の中で一番デメリットと感じていることは、堅苦しくストレスを感じるであった。この項目を性別での回答で比較すると、男子の方が堅苦しさを感じている。特に詰襟学生服を着用している生徒は、肯定的な回答が86.9%にも及んでいた。女子では、イートン型の割合が高く、セーラー型、プレザー型よりも20%ほど高い割合となっている【図4-2】。

保護者からのデメリットに対する肯定的な回答をまとめた割合は、成長や転校に伴う買い替えが必要になる89.9%、性差によるデザインの違いや価格差が生じる58.3%、各学校によるデザインの違いや価格差が生じる56.6%、保護者の経済的負担の加重になる53.2%、不衛生である40.8%、生徒の個性や自主性が尊重されない42.2%、服装選択自由の侵害になる35.1%、身だしなみの指導の負担が大きい17.5%であった【図4-3】。教員では、成長や転校に伴う買い替えが必要になる

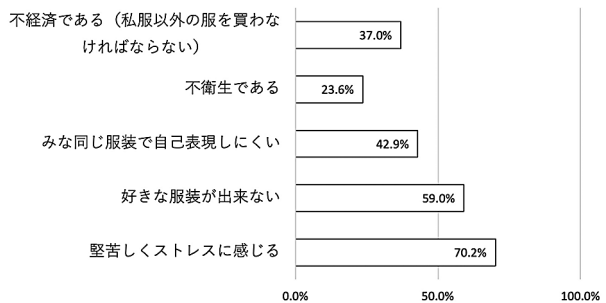


図4-1. 中学校制服のデメリット (生徒の各要素への肯定的な回答の割合)

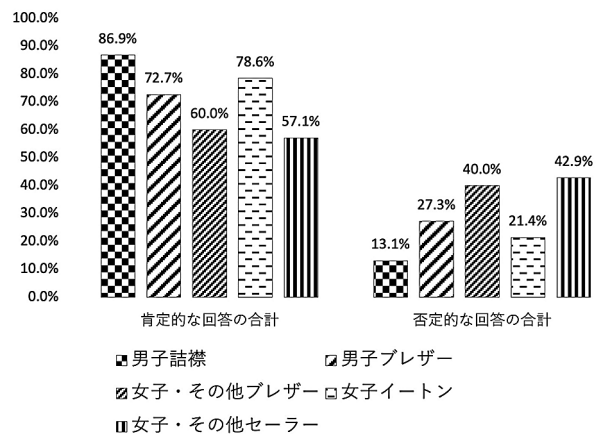


図4-2. 中学校制服のデメリット (生徒) (堅苦しくストレスを感じる)

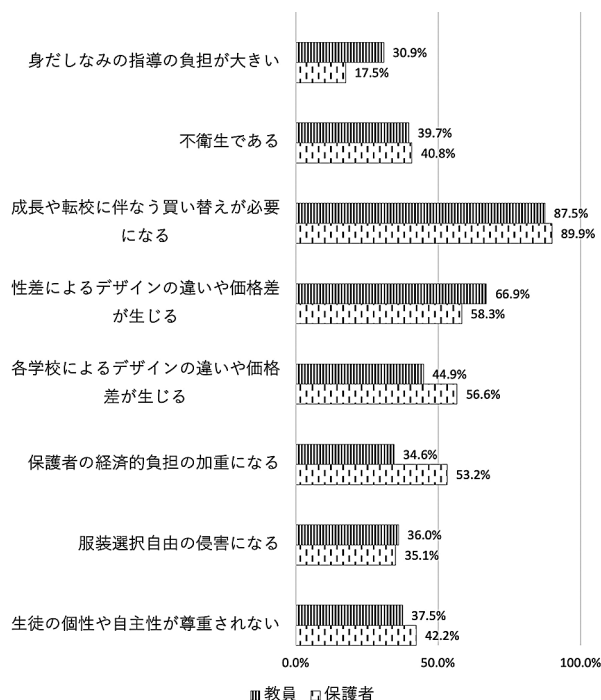


図4-3. 中学校制服のデメリット
(保護者と教員の各要素への肯定的な回答の割合)

87.5%、性差によるデザインの違いや価格差が生じる66.9%、各学校によるデザインの違いや価格差が生じる44.9%、不衛生である39.7%、生徒の個性や自主性が尊重されない37.5%、服装選択自由の侵害になる36.0%、保護者の経済的負担の加重になる34.6%、身だしなみの指導の負担が大きい30.9%であった【図4-3】。

教員も保護者も共通して第一にデメリットと強く感じているのは、成長や転校に伴う買い替えが必要になるという事柄であった。メリットの回答の中でも見られたが、保護者の経済的負担の加重になることについては、教員と保護者の回答に差が大きくあり、保護者の半数が加重として捉えていることがわかる。身だしなみの指導の負担が大きいについては、デメリットと捉えている傾向は低く、全体的には制服があることで身だしなみの指導がしやすいと捉えられるが、負担に感じている教員も30%ほどいる。性差によるデザインの違いや価格差が生じる、各学校によるデザインの違いや価格差が生じることについては、昨今のニュースでも取り上げられているため、デメリットとして問題視する回答が多いと考えていたが45～60%程度にとどまる結果となった。

4) 中学校制服のアイテム別による問題点

ジャケットについて各項目の肯定的な回答の割合が高い順に列挙すると、堅苦しい66.8%、デザインが良い57.8%、寒さに対応しやすい49.1%、そで口が活動の妨げになる46.3%、生地の肌触りや着心地が良い46.0%、

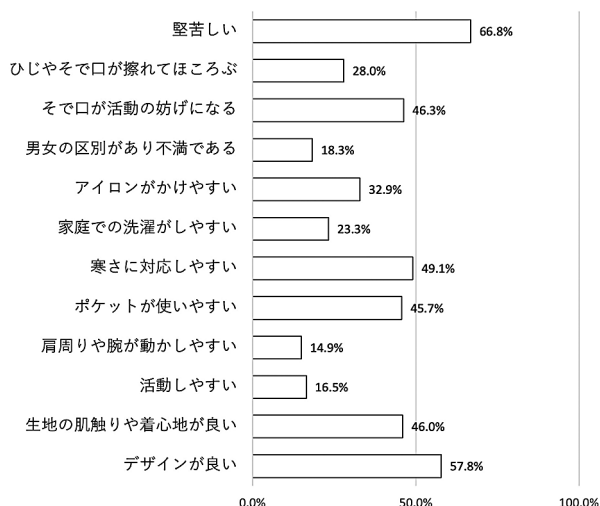


図5-1. 中学校制服のアイテム別による問題点
(ジャケットについて生徒の各要素への肯定的な回答の割合)

ポケットが使いやすい45.7%、アイロンがかけやすい32.9%、ひじやそで口が擦れてほころぶ28.0%、家庭での洗濯がしやすい23.3%、男女の区別があり不満である18.3%、活動しやすい16.5%、肩周りや腕が動かしやすい14.9%であった【図5-1】。特に、活動性と取扱いのしにくさに大きく問題を感じている。

スラックスを持っている生徒への質問の肯定的回答の割合を高いものから列挙すると、夏の季節には暑い79.2%、雪の降る時期や雨の日にすそが濡れる69.8%、堅苦しい56.2%、デザインが良い55.1%、ポケットが使いやすい47.6%、すそが活動の妨げになる46.7%、生地の肌触りや着心地が良い46.7%、アイロンがかけやすい45.3%、ひざの曲げ伸ばしや足が動かしやすい35.2%、活動しやすい34.3%、長めのブーツがはきやすい32.4%、家庭での洗濯がしやすい31.1%、スカートの人が多いので人目が気になる10.9%であった【図5-2】。ジャケットと同様に、活動しにくい要因や体温調節のしにくさが問題点として見えた。

性別で女子とその他と回答している生徒のスラックスを持っている割合は非常に低く、183人中8名の4.4%であった。スラックスを選択できる学校も多くなってきているはずであるが、その浸透率は低いことがわかる。その理由としては、女子用制服として選択できない24.5%スカートの方が好き21.8%、スカートの人が多いので人目が気になる18.2%が上位を占めていた(複数回答)【図5-3】。その他の回答の中では、「女だから」、「スラックスという選択肢がなかった」、「LGBTの人が対象といていたから」、「スラックスが何かわからない」、「男女平等と言われるけど今までの固定概念が消えず他人からの目が気になる」「経済的に買えなかった」、「購入時に聞かれず、入学するまでスラックスが認められている

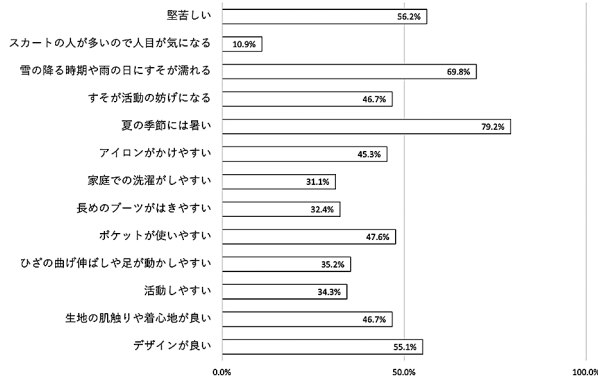


図5-2. 中学校制服のアイテム別による問題点 (スラックスについて生徒の各要素への肯定的な回答の割合)

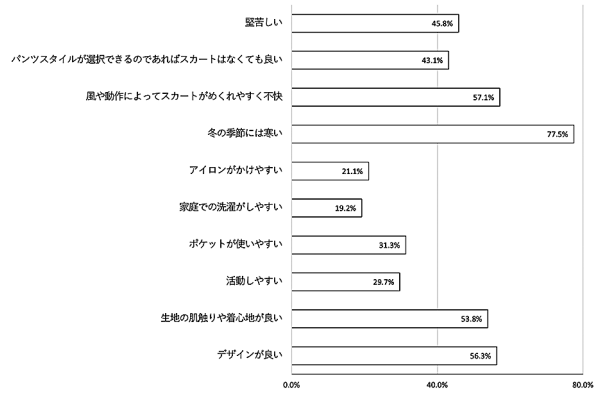


図5-4. 中学校制服のアイテム別による問題点 (スカートについて生徒の各要素への肯定的な回答の割合)

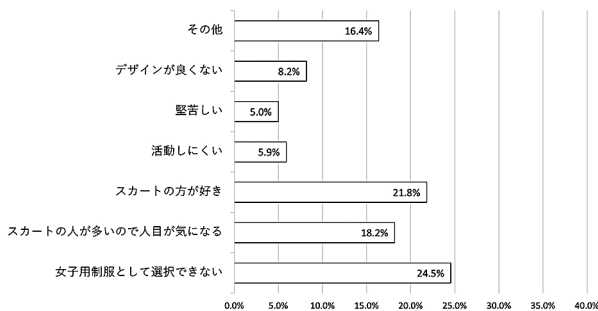


図5-3. 中学校制服のアイテム別による問題点 (生徒のスラックスを持っていない理由) 複数回答

ことを知らなかった」、「スカートで良いと思ったから」、「あまり制服を着ないから、そんなに使わないと思うから」などの回答があった。これまでのジェンダー意識の固定概念とスラックスが選択しやすい環境が整っていないことが窺える。

スカートについての肯定的な回答を割合の高いものから列挙すると冬の季節には寒い77.5%、風や動作によってスカートがめくれやすく不快57.1%、デザインが良い56.3%、生地の肌触りや着心地が良い53.8%、堅苦しい45.8%、パンツスタイルが選択できるのであればスカートはなくても良い43.1%、ポケットが使いやすい31.3%活動しやすい29.7%、アイロンがかけやすい21.1%、家庭での洗濯がしやすい19.2%であった【図5-4】。スラックスとは反対に、スカートは寒さに対する調節がしにくいアイテムであることが明らかとなった。この寒暖差の大きい北海道の地域では、1年を同様の一つのボトムスタイルで過ごすことは困難なことである。

スカートも他のアイテム同様に、活動しにくいと考える割合が高くなっている。風や動作によってスカートがめくれやすく不快と感じている割合は、57.1%と6割弱に留まっているが、活動性の問題の一つとして改善すべきことと捉えている。また、アイロンがけや家庭での洗濯などの取り扱いについて、ジャケット、スラックスのアイテムと比較すると、スカートの取り扱いに、いち

ばん困難さを感じている。制服のスカートは、プリーツスカートのデザインであることがほとんどであり、そのプリーツのひだを壊さないよう洗濯やアイロンをかける困難さからの要因が考えられる。

パンツスタイルが選択できるのであればスカートはなくても良いと考える割合は、43.1%であった。スカートは女性らしさの象徴的なアイテムではあるが、現在では、半数近くはスカートの必要性を感じていない。また、女子でスカートを持っていない生徒は1名であった。その理由は、スカートは嫌い、デザインが良くないということ、その他の自由記述に「トランスジェンダー」と記載されていた。女子制服=スカートという考え方は、時代にそぐわないものになっていることが、このアンケートからも明らかとなった。

スカートを持っていない男子の理由(複数回答)としては、男子のはくものではない38.0%、男子用制服として選択できない31.6%という理由に回答する割合が高かった【図5-5】。スカートをはきたいが人目が気になるという割合は2%ほどみられる。男子がスカートをはくことは浸透しにくいのかもしれないが、現にスカートを持っている男子も1名いる。古い歴史や国によっては、男性のスカートスタイルは珍しいことではなく、近年でもファッション感度の高い男性のファッションにも

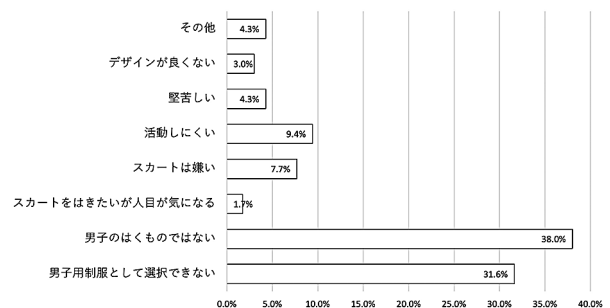


図5-5. 中学校制服のアイテム別による問題点 (生徒のスカートを持っていない理由)

これからの学校に求められる制服デザインの方向性

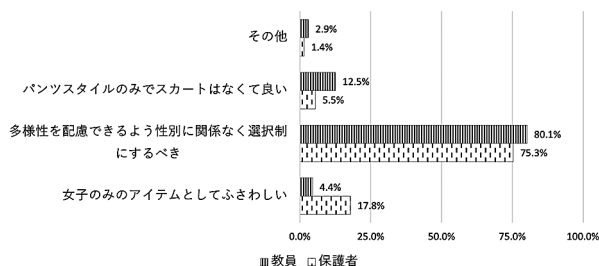


図5-6. 中学校制服のアイテム別による問題点 (保護者と教員のスカートに対する意識)

取り入れられている。今後ますますグローバルな観点で拓かれていく教育においては、男子生徒がスカートを選択できることがあっても良いと考えるが、学校の活動性の高い日常生活においては、性別に関係なく必要度は低いように感じている。また、保護者と教員に対するスカートについての問いでは、女子のみのアイテムとしてふさわしい、保護者17.8%、教員4.4%、多様性を配慮できるよう性別に関係なく選択制にするべき、保護者75.3%、教員80.1%、パンツスタイルのみでスカートはなくて良い、保護者5.5%、教員12.5%の割合で回答が得られた【図5-6】。保護者教員ともに多様性に配慮し選択制にすることを考えている傾向が強く、選べることが必須条件になっていくと考えられた。

5) 指定ジャージの活用状況と問題点

新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、制服の活用方法にも大きな変化があった。コロナ禍では、日常的にジャージ登校にすることで、衛生面の保持や更衣室での密を避ける取り組みが見られる学校が多くなった。教員に対する、コロナ禍でのジャージ登校の増加に対する問いでは、はい55.1%、いいえ18.4%、コロナ禍に関係なく以前から普段はジャージ登校26.5%という回答が得られた【図6-1】。

この日常的なジャージ登校についての意識を各項目で尋ねた生徒の肯定的回答は、本来は体育や実習以外での場面ではふさわしくない16.8%、気持ちが引き締まらず学校生活が乱れている10.2%、制服時よりリラックスして良い印象を感じる89.4%、制服と変わらない意識

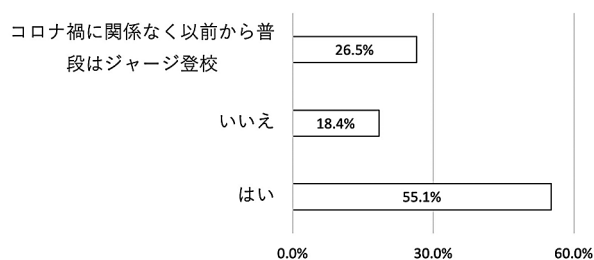


図6-1. コロナ禍でのジャージ登校の増加の有無

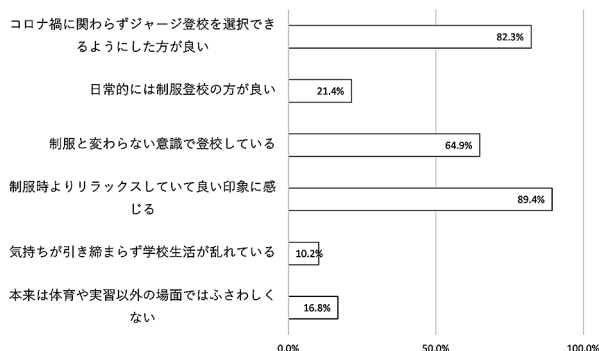


図6-2. 日常的なジャージ登校についての意識 (生徒)

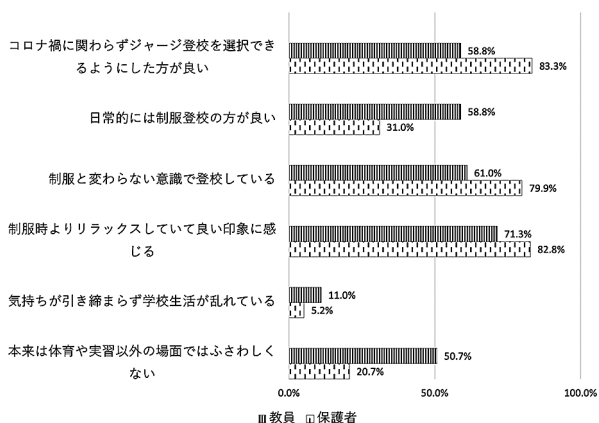


図6-3. 日常的なジャージ登校についての意識 (保護者・教員)

で登校している64.9%、日常的には制服登校の方が良い21.4%、コロナ禍に関わらずジャージ登校を選択できるようにした方が良い82.3%であった【図6-2】。

保護者については、本来は体育や実習以外での場面ではふさわしくない20.7%、気持ちが引き締まらず学校生活が乱れている5.2%、制服時よりリラックスして良い印象を感じる82.8%、制服と変わらない意識で登校している79.9%、日常的には制服登校の方が良い31.1%、コロナ禍に関わらずジャージ登校を選択できるようにした方が良い83.3%であった。教員については、本来は体育や実習以外での場面ではふさわしくない50.7%、気持ちが引き締まらず学校生活が乱れている11.0%、制服時よりリラックスして良い印象を感じる71.3%、制服と変わらない意識で登校している61.0%、日常的には制服登校の方が良い58.8%、コロナ禍に関わらずジャージ登校を選択できるようにした方が良い58.8%であった【図6-3】。

生徒と保護者は、ジャージ登校に対して肯定的であり日常的には、制服登校よりもジャージ登校を望む意見が多い。教員は、生徒と保護者に比べるとジャージをコロナ禍と同様に活用していくことには消極的であると言えるが、ジャージのこれまでの役割は、その範疇を越え、

学校の日常生活の主役の衣服となり得ている。

6) 中学校制服の必要性

制服の必要性に対する問いの回答は、あった方が良く、どちらかといえばあった方が良く、の肯定的な回答の合計は、生徒では79.8%であり、性別で比較すると、女子の方が17%ほど、その割合は高い。保護者では82.8%，教員では86.0%という回答が得られた【図7-1, 7-2】。この問いは、アンケートの最後に行い、制服について十分に考えてもらった上で行った。また、生徒と保護者については、小学生の時の服装が自由であったことへの不都合さへの問いも行っているが、不都合がなかったと回答している生徒は83.2%，保護者は88.2%であった【図7-3, 7-4】。それに関わらず、中学校では制服を必要とする回答の割合が高い。

しかし、生徒の性別で比較し、男子に注目すると、小学生時の不都合さはなかったと回答する割合が、92.8%と高く、女子との差も大きく、制服の必要性を感じる割合も他の対象者に比べると10%ほど低い。それは、入学前の制服に対する期待感の低さからもわかる。制服の持続可能性を高めるには、男子の制服に対する意識や不満点に注目することも重要なポイントであるように感じられた。

各回答に対する理由の自由記述から、生徒・保護者・教員ともに、あった方が良く理由としては、「学校行事や儀式、テスト、受験などの場面で制服が必要」という理由が多く寄せられていた。生徒では、その他、「学生らしい」、「学生のときだけにしか着られない」という意見や、「緊張感が持ちやすく気持ちが引き締まる」という事などが挙げられていた。保護者のその他の理由としては、「服装に悩まなくて良い」、「冠婚葬祭にも使える」、「経済的負担の軽減」などの理由が多かった。どちらかといえばあった方が良くとするものの、「使用回数が少ないのならなくても良い」、「安価なものを求める」声もあった。教員では、「保護者の経済的負担の軽減」と「経済格差が分かりにくい」という理由が多く見られた。

生徒のない方が良く理由としては、「活動しにくい」という理由が多数で、「堅苦しい」、「体温調節がしにくい」、「衛生面への不適合」などの理由もあった。ない方が良くと考える保護者の意見としては、「価格が高い」、「着用回数が少ない」、「ジャージで良い」との意見が多く上がっていた。教員では、「多様性」や「自主性」、「考える力を養うため」などの理由が挙げられていた。

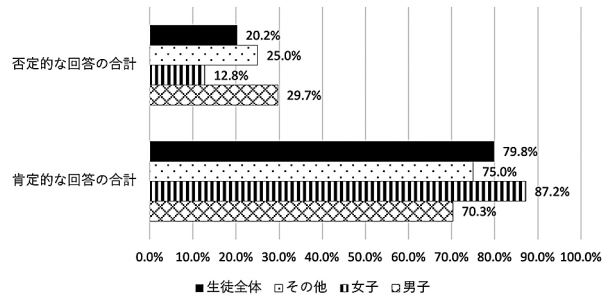


図7-1. 制服の必要性 (生徒)

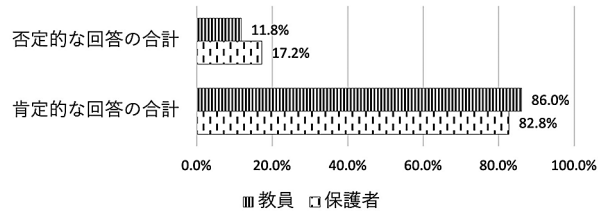


図7-2. 制服の必要性 (保護者・教員)

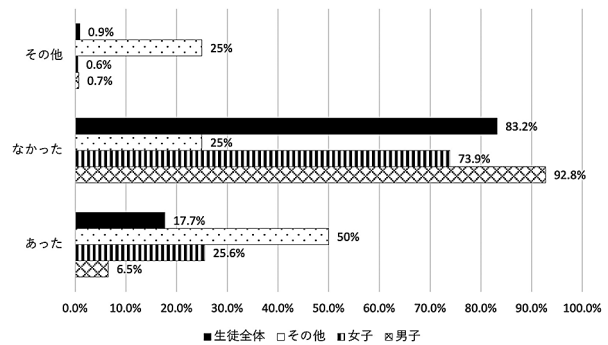


図7-3. 小学生時の私服登校での不都合の有無 (生徒)

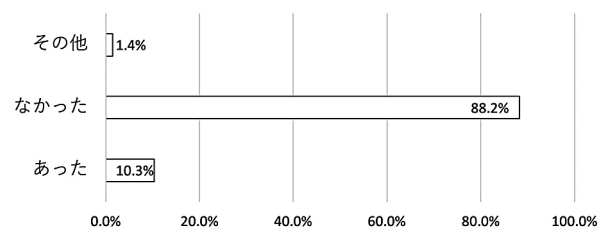


図7-4. 小学生時の私服登校での不都合の有無 (保護者)

7) 中学校制服のサスティナブルファッション性

制服がなく私服登校になった場合の衣服の量についての問いでは、生徒の回答は、はい63.7%，いいえ18.6%どちらもいえない16.8%，その他0.9%であった。男子よりも女子の方が増えると考えている割合が高い【図8-1】。保護者については、はい85.6%，いいえ3.7%，どちらもいえない10.6%という結果であった。また、保護者に対しては、私服登校になった場合の衣服費の変化についても尋ねたところ、増える74.1%，変わらない20.7%，減る4.0%，その他1.1%という結果が得られた【図8-2】。衣服の量、費用ともに増大す

る可能性が非常に高く、制服があることは、環境への負荷軽減や家庭経済への負担軽減の持続可能性が期待される。

さらに、保護者に対しては、着用しなくなった制服の処分方法を尋ねたが、ゴミとして廃棄する、の回答は13.9%と低く、知人などに譲る49.6%、PTAの回収に持っていく14.9%、リサイクル店へ持っていく10.6%、資源回収に持っていく4.5%、その他6.4%であった【図8-3】。その他における記述の中でも、「兄弟姉妹のお下がりや記念にとっておく」などの回答が見られ、制服は、リユースの意識や大切に感じる意識が高いものであり、サステナブルファッションとして位置付けることができた。

また、制服価格の高騰を防ぐ、リユース率を上げる目的で、制服採用を各学校単位から、北海道や振興局などの大きなスケールでの採用とし、制服のデザインを統一することの提案に対しての教員の回答は、問題はない20%、問題がある43%、どちらもいえない37%であった【図8-4】。その理由としては、学校の区別がつきにくいというもののが大半であった。北海道では、他県で行われ始めているような制服の持続可能性を意識した取り組みへの理解はあまり得られていないと考えられる。

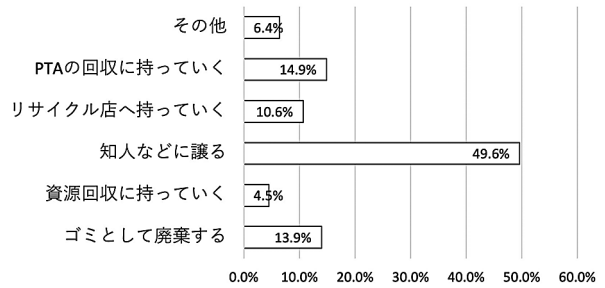


図8-3. 中学校制服のサステナブルファッション性 (保護者の着なくなった制服の処分方法)

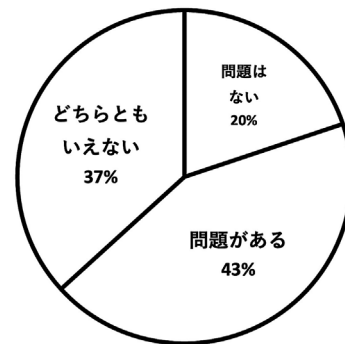


図8-4. 中学校制服のサステナブルファッション性 (教員のスケールを広げた制服決定と制服デザインの統一に対する意識)

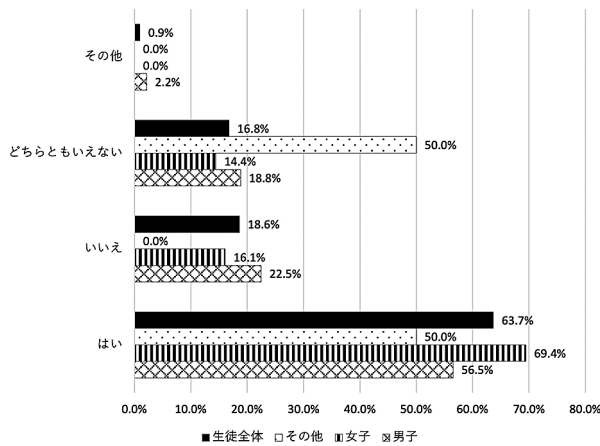


図8-1. 中学校制服のサステナブルファッション性 (生徒の私服登校になった場合の衣服の量の増減)

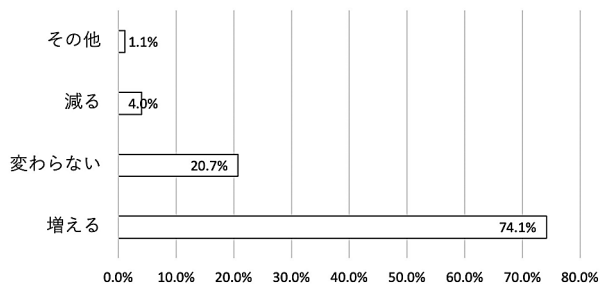


図8-2. 中学校制服のサステナブルファッション性 (保護者の私服登校になった場合の衣服費の増減)

IV. 北海道の公立中学校制服の問題点と今後求められる制服デザインの方向性

アンケートの結果から、現在の制服にはさまざまな問題点がありながらも、これからの学校にも制服は必要であると捉えることができた。コロナ禍でジャージ登校が日常的になり、その利便性を体感していても、学校行事や儀式、テスト、受験などの場面では、学生らしい正装である制服を求めている。

日常的には、ジャージが制服として活用され、儀礼的な場面では各自の私服を用意することで、これまで挙げてきた問題点を解決できるようにも考えられる。しかしながら、私服では、制服にある、学生らしく見える、毎日の服装に悩まなくて良い、身だしなみを指導しやすい、身なりが公平で経済格差が表れにくい、生徒であることがわかりやすく安全性があるというメリットを打ち出すことが難しい。制服のメリットとして求める学生らしさは一般的な私服の正装にはない独特のデザインが要求される。私服では生徒や保護者が求める学生の時にしか着られない装いには近づけず、中学生徒であるという目印にもなりにくい。また、教員や保護者にとっては、例え、儀礼的な場面だけだとしても、一律ではない私服に対する身だしなみの指導の困難さや、経済格差が露呈

することが懸念される。

制服のデメリットを改善し、制服がない方が良く考えている生徒や保護者、教員にも納得してもらえるような制服デザインを見出し、今後も制服を学校教育の場で活用することが求められていると考察している。

制服のデメリットや問題点は、堅苦しくストレスに感じる、また、ジャケット、スラックス、スカートどのアイテムにも見られた活動しにくさや取扱いの困難さ、成長や転校に伴う買い替えと制服の価格が高い、さらには、多様性への対応が十分ではないということである。これらの問題点は、フォーマル性とカジュアル性を包含しジャージのようにジェンダーレスなデザインを提案することや制服決定のスケールを各学校単位から北海道や振興局などの大きなスケールでの採用にすることで解決できるのではないかと考えている。それらを具体的に以下の3点にまとめた。

1. ジャージの利便性を活用した制服デザイン提案

大半の生徒が、日常の学校生活ではジャージでも支障がなく、むしろ制服よりリラックスできて良い印象に感じており、コロナ禍に関わらずジャージ登校を選択できるようにした方が良く考えている(Ⅲ. - 2. - 5.)。また、現在のフォーマル性の強い制服デザインに対して生徒が一番に感じているデメリットは、堅苦しくストレスなことであった(Ⅲ. - 2. - 3.)。ジャケット、ボトムスのどのアイテムにも活動しにくさを感じている(Ⅲ. - 2. - 4.)。ジャージでの活動しやすい生活に慣れた状況下では、フォーマル性の強い堅苦しい制服を日常の学校生活で着用することは、ますますストレスに感じる事が推察される。

保護者からも、ジャージの取り扱いのしやすさや活動のしやすさなどのメリットから、ジャージのような制服を求める意見や、ジャージ登校が可能なのであれば制服の存在を疑問視する意見もあった。また、制服着用機会が減少したことで、着用回数と制服の価格が見合っていないと感じている保護者もいる。

教員は、生徒や保護者に比べるとジャージ活用に対する積極性は低いが、コロナ禍で顕著となったジャージのメリットを活用しながら、制服の活用率も上げるためには、制服にカジュアル性を持たせることが解決につながると考えられる。ジャージと同様に堅苦しくなく気軽に着用することができながらも儀礼的な機会にも活用できるようになれば、ジャージばかりの着用にならず、日常的に制服とジャージを着回せるようになり、衛生面でも活躍できると考えた。さらには、制服とジャージのコーディネートもできるようにデザインすることで、少ないアイテムで、季節や体調に合わせて体温調節などもしや

すく、個人の考えで組み合わせを選べることも視野に入れている。

2. ジェンダーへの偏見を解決する制服デザイン提案

現在の道内の中学校の制服は、男女の差が出にくいブレザー型への移行も多くなっている。アンケートからもブレザー型のデザインに移行することで、生徒の制服に対する満足度は高くなっていることは見受けられたが、ジェンダーへの偏見が解決したわけではない。パンツスタイルが選択できるのであればスカートはなくても良いと回答している女子は半数近くに上る(Ⅲ. - 2. - 4.)。にもかかわらず、女子用制服として選択できない、スカートの人が多いので人目が気になるという理由などから、スラックスを着用したくてもしにくい状況にあることがわかる。女子がスラックスを選べるようになったことは性的少数者への対応のためだけに導入されるようになったと考える人もいるが、本アンケートからも、スカートが好きではなかったり、寒さ対策、活動のしやすさ、足を出すことが苦手などの理由で、本来はスラックスを着用したい女子の声が見られた。

私服では、抵抗なくパンツスタイルを着用しているはずだが、現在の学校制服の選択の場面に限っては、パンツスタイルを選択することはハードルが高いものとなっている。それだけ、学校制服が男性らしい正式な服装はスラックス、女性らしい正式な服装はスカートという意識づけをしてきたことが窺える。

最近リニューアルしている学校の制服は、男性体型用のジャケットにはⅠ型、女性体型用のジャケットにはⅡ型などと種別し、性差を表面化しないよう工夫しているが、ディテールデザインは同じでも体型に合わせて衣服パターンが作られているため、見た目のシルエットが異なっているものも多い。ジャケットのⅠ型かⅡ型か、スラックスかスカートか、は選択できるようになっているが、制服企業や販売店のホームページでは、男性体型用ジャケットにはスラックス、女性体型用ジャケットにはスカートがコーディネートされて紹介されており、それが指定であると記載されている例もある。男子はスラックス、女子はスカートというイメージは拭えていない。選択ができるとはいつても、選択しにくい環境である。

これらの状況の中で、制服にカジュアル性を持たせることは、ジェンダーレスな制服デザインが展開しやすくなる。男女の体型の違いを包含する衣服構造にするためには、カジュアル性を持ち込んだデザインの方が対応させやすい。まずは、ジャケットのデザインをジェンダーレスに男女が全く同じものを着用できるデザインを提案することで、コーディネートするボトムスも個人の個性

に合わせて選択することがしやすくなるのではないかと考えている。

3. スケールを広げた制服採用の提案

各学校では、学校独自の仕様による制服を制定している場合が多い。学校の特色を表し他校との区別があることによって、帰属意識を高めることや防犯対策などがその理由である。しかし、本研究のアンケート調査(Ⅲ. - 2. - 2.)からもわかる通り、制服を着用することが帰属意識に繋がらず、学校独自の制服仕様によって帰属意識を高めることは難しい。また、入学前の中学校制服に対する意識の調査結果(Ⅲ. - 2. - 1.)から、制服を着ることを楽しみにしている生徒や、制服を着ることで子どもの成長が感じられて嬉しいと感じる保護者は少ない。特に、男子生徒では楽しみにしている割合が1割程度、女子でも楽しみにしているのは生徒の半数にも達しない。制服を着用することが当たり前のこととして慣例化している。

学校独自の仕様による最大のデメリットは、制服の価格が高くなることと成長や転校に伴う買い替えである。道外では、制服の価格を抑えるために公立中学校の制服を自治体でひとつに決め、共通のものにする動きが見られるようになってきた。公正取引委員会での調査では、現在主流となってきたブレザー型の平均販売価格を比較すると、制服仕様の共通化を行っている自治体では行っていない自治体の制服価格よりも9千円ほど安い^{註4)}。学校の選択権が原則として認められていない中学生に対し、高価格化する要因のひとつと言える学校独自のデザイン制服を押し付けるのは不合理と考える。

しかし、北海道の中学校では、自治体ごとに共通の制服を考える意識は低い(Ⅲ. - 2. - 7.)。学校間の区別や学校の特色がなくなるという問題点を指摘する意見は多かったが、前述の通り、生徒や保護者に経済的負担を負わせてまで学校の特色を出すメリットは少なく、各学校の校章を身につけるなどの何気ない工夫で区別はつけられる。制服がない方が良いと回答している理由として、「制服が高い」との理由も圧倒的に多い。制服はあった方が良いと回答していても、「価格をどうにかしてほしい」という意見は挙がっている。「義務教育なのであれば、支給やレンタルにするべき」という意見もある。

さらに、制服はリユースする意識が強く持たれるものであることが明確となったが、制服決定の枠が大きくなることで、リユース率が高くなり、成長や転校に伴う買い替えにも役立ちやすくなる。サステイナブルファッションとして今後の社会が取り組まなければならない環境負荷への問題を解決する一端を担う存在とも考えられ

る(Ⅲ. - 2. - 7.)。義務教育の中で、制服が必要なのであれば、行政機関も制服のサステイナビリティを積極的に議論し、そういった声に応えることが求められている。

V. 成果と今後の展望

本研究は、北海道における中学校制服の現状を捉え、未来における制服デザインの方向性を提案することを目的に行なってきた。制服の概要と学校制服の歴史や先行研究をふまえるとともに繊維ファッション業界が抱えている問題にも目を向け、制服の様々な問題点と新たな必要性に注目した。現在の北海道における中学校制服の問題点を明らかにするために、公立中学校の生徒とその保護者、教員を対象にアンケート調査を実施し、貴重なデータを得ることが出来た。その調査の考察からは、学校独自の仕様による制服が価格を押し上げていること、ジェンダーへの偏見が残る制服デザインが多様性の問題を解決しないこと、コロナ禍にジャージの利便性が顕著となったことで見えてきた制服の活動性のことなど、重点な問題点が導き出された。

その問題点を解決する新たな中学校の制服デザインは、フォーマル性の強い制服の着用機会の減少やジャージの利便性から、日常の学校生活に対応した活動的な制服で、ジャージのようにジェンダーレスで取り扱いがしやすいものが求められていると推察した。これからの日本の教育は個別最適化された学びと協働的な学びを進めるために学校の在り方も大きく改革することを推進している。生徒が主体的に考え学びを深められる教育へ変わろうとしている。学校での衣生活についても、学校の特色を背負った制服デザインではなく、よりよく生きるために、生徒個人が自ら考え納得できる装いを見つけ選ぶことができるような制服デザインを提案したい。

今後は、アンケート調査から得られた、制服に望む機能、新たに望む制服のアイテムやイメージと色などの調査結果を考察するとともに、新たな制服デザインの具体的な提案、制作研究を行う。

VI. 謝 辞

アンケート調査にご協力いただいた北海道の公立中学校の校長をはじめ教職員の皆様、そして生徒の皆様、保護者の皆様には、本研究を進める上で貴重なご意見を多数いただきましたこと厚く御礼申し上げます。また、制服リニューアルにおける貴重なお話と多くの資料をご提供くださった札幌市の公立中学校長に心から感謝申し上げます。

Ⅶ. 注

- 注1) 馬場まみ「ジェンダーの視点からみた学校制服の課題-女性差別撤廃条約の理念を軸として-」『日本衣服学会誌』Vol. 62 No. 1 2018年 p 9 - 14
- 注2) 錦光山雅子「家計を直撃する「学校指定物品」：制服報道からみえた消費者問題」教育科学研究会編『教育』2019年6月号p71-76
- 注3) 小林哲夫『学校制服とは何かその歴史と思想』朝日新聞出版 2020年
- 注4) 垣内晋治, 中井 奨, 山中康平「「公立中学校における制服の取引実態に関する調査報告書」の概要について」公正取引協会編『公正取引』No. 809 2018年p37図表2仕様の共通化を行っている自治体と行っていない自治体の平均販売価格

Ⅷ. 引用文献

- 1) 馬場まみ「戦後日本における学校制服の普及過程とその役割」『日本家政学会』vol. 60 No. 8 2009年 p 721
- 2) 1) に同じ
- 3) 垣内晋治, 中井奨, 山中康平「「公立中学校における制服の取引実態に関する調査報告書」の概要について」公正取引協会編『公正取引』No. 809 2018年p33-40
- 4) 文部科学省「学校における通学用服等の学用品等の適正な取扱いについて（通知）」mext.go.jp 2018年
- 5) 太田蓉子「学校制服が象徴するものとその歴史的変容（5）」『家庭科教育』76（11）2002年 p68
- 6) 馬場まみ「ジェンダーの視点からみた学校制服の課題-女性差別撤廃条約の理念を軸として-」『日本衣服学会誌』Vol. 62 No. 1 2018年 p13
- 7) 文部科学省「性同一性障害や性的指向・性自認に係る，児童生徒に対するきめ細やかな対応等の実施について（教職員向け）」2016年
- 8) 7) に同じ
- 9) 畠山歌子「釧路市における中学生の制服に関する実

態と意識」『釧路論集：北海道教育大学釧路校研究紀要』16号 p157-175 1984年 p174

- 10) 環境省「SUSTAINABLE FASHION これからのファッションを持続可能に」env.go.jp 2021年

Ⅸ. 参考文献

- 1) 馬場まみ「戦後日本における学校制服の普及過程とその役割」『日本家政学会』vol. 60 No. 8 2009年 p 715-722
- 2) 加藤 靖, 松尾由希子「制服を通じた集団指導体制のみなおしによる学校改革の取り組み：「総合的な学習の時間」を活用，個の尊重をふまえた社会的自立をめざして」『静岡大学教育研究』17巻2021年 p. 53-68
- 3) 山内豊二「経済学からみた「使い捨て」の意義」『繊維製品消費科学』13巻9号 1972年 p. 391-394
- 4) 菅公学生服株式会社「学校制服の必要性」『カンコーホームルーム』vol. 167 2019年 <https://kankogakuseifuku.co.jp>
- 5) 環境省「SUSTAINABLE FASHION これからのファッションを持続可能に」 env.go.jp 2021年
- 6) 難波知子『学校制服の文化史 日本近代における女子生徒服装の変遷』株式会社創元社 2012年
- 7) 錦光山雅子「家計を直撃する「学校指定物品」：制服報道からみえた消費者問題」教育科学研究会編『教育』2019年6月号p71-76
- 8) 垣内晋治, 中井 奨, 山中康平「「公立中学校における制服の取引実態に関する調査報告書」の概要について」公正取引協会編『公正取引』No. 809 2018年 p33-40
- 9) 文部科学省「中学校学習指導要領」平成29年
- 10) 文部科学省「性同一性障害や性的指向・性自認に係る，児童生徒に対するきめ細やかな対応等の実施について（教職員向け）」2016年
- 11) 村田温子・渡辺澄子「中学生・高校生の衣生活について-制服に対する意識および服装への興味関心-」松阪大学短期大学生活科学研究会紀要（52）2004年 p 1 - 14

The Direction of Uniform Design for Schools in the Future

– A Survey of Public Junior High School Uniforms in the Corona Disaster –

This study is a design study of uniforms in public junior high schools. The objective was to propose a new uniform design that better reflects the needs of students, parents, and schools for uniforms, paying attention to the problems faced by the current textile fashion industry. In addition to the issues of price and gender that have been discussed as problems with uniforms, we focused on the function of uniforms and the sustainable fashionability of uniforms by focusing on the so-called “jersey attendance” at the Corona Disaster. We conducted a questionnaire survey of students, their parents, and teachers enrolled in public junior high schools in Hokkaido to explore current attitudes toward uniforms in public junior high schools and the advantages and disadvantages of uniforms in general, to reveal the various problems with uniforms and to investigate what is required of uniforms in the future. From the survey results, it was derived that there are many problems with the activity of uniforms. It also revealed that further innovations are needed in issues related to price and gender, where improvements are beginning to be implemented. From these issues, a direction to propose a genderless design like jerseys that encompasses both formal and casual wear was derived. We will continue to propose new uniform designs based on the results of the survey of required functions and images, with these directions as the main focus.

keywords : uniform design, middle school, sustainability, gender